花はさくらに

はるの花。秋は月とのみ見ば世
乃常なり。乃種をあきらかにすれば。
のこらずて。はなとくみさかり見ればあだなし。
さだめなりおくりまでなる人ぞとなをつまそでぞの兒稚
乃けしきをあらはしとりたるなり。まよはずて。月乃多
らんまんたるは佳名なり。ねてみるこそとぞ楽しき至
常にもよまれたるなり
徹書記(てつしよき)の言葉にしてなんぐ人は兼好一人なりといはれしと
うけたまはるは。又徹書記一人なりそれをえうやむ人の
すれこそ口おしけれ
あらそやしみしさは　花のけしきなり
化ろる契(ちぎり)をうるのは　恋乃もみぢなり
ひりしを恋人は　忘れおくりなき
はしめもなるもおくりもおもしろくてこそ恋乃

なさけハ遊べかれ
撞木の千塚のくそしかれど立づけ
并出乃下紐のいろけなきよりひもどきめ
あがしのりまちにおもしをあてなりずれバなくとくれ
いそれど
出合がしらに袖つまづき。ゆりだらしに分かよいぞてあすべよし。
あらずんへ紙まででなんどハうれハうつさまでまつりでこ。江戸の
せいしき。業部座のうせざハ。宮家し太。野良猫の更にこそ。
今様のはやりきいりて色このまはりん男ハなんどいはずら
めし杉風箱月雨に濡りし天地のあかめ。千草万木は
妙なりし泥溺て偏に迷ぞて又一向無し情もなくて
くもんハ煩悩即菩提色即是空ならあらず
色りのなかみしらの今さ紘
ゆめしくらきう法をう行しき

此られしき縁し二またをくし泥溺ハ煩悩厭離をしげ菩提
なるべ相即にあるれ。執し著しハめさしれハ苦思をしりに迷ひハ也。
厭離し切るべ断無に落て。実相にハあるれ取て捨。捨て
取。取りし捨もしてこそ。六根のめさよしぞるひろき恵乃我
国神乃御訓ぞうし。此をすてハ源氏伊勢物語ら此つま
くれまとめねてすかたり
儒制によしべ戯言戯動の小人此業にして君子のふくむ所也
仏戒よらまれハ妄語綺語乃行として舌を抜るし地獄乃罪
人なるん

おちさく　巨度　言多　事しあくといふなるかり
と旧桝にあれともこち
さくハ今様にいふところをえし濃光とうなへしこ南ふうさ
たりかやくおかり。一年より中すれバゆりしきうり次下にこち

百卒二

荒夷　あらびえ

匹如身　素性なり

百五十

手下の猴猿

百卒一

立得

賞賜

百卒二

曝穂穿

詠の字　不審

百卒四

百卒六

縁の字　実い縁あり

百卒七

白地　安国

百卒九

義式孔式

何々の式

見ひらい伊行げ女のけう物とぬ。後撰集のはが
より是を式くるめといふさうこうろうへ

小野小町

玉造の作者いとぬの清行ろう。小町と同
者のおひい弘法の弟子高雅ろ高野めぐし。
それまでい何代ようぞ。弘法ようをさ世ろうきさ世ろれいなり。
とぬの清行げ。小野の小町中。弘法中のやうれうもろい想して
中ぬくろ人のうちろ紙書ろい。彼のやうのし。あてはきく
ろ紙出ぬるろうろ。まの老ろうろそのけを動どふ。弘法小町
といふろう。それゆへ弘法ろ目強へ入ろうろ人し重ねもさ
ぐろうぬと書そはのこまと行ものなり

小鷹大夫の事

小鷹大夫ろ大きはくへさ物へ学問を
をちろうあの学問そ。ろけうれいなる者も身の害ろ
たろうを学ばよろへてりもろなり

坐平の事

坐平の字ぬれも早論のろよし
はるふるまけもうていふまに
つふろまろ帝ていろ

鳴呼の事

鳴呼とうもろ　鳴呼の岡れ者の話のちんと
行ろれもろ行ろうろ
ろ紙立ろうて乙甲の老ろ
ろ紙書へしその略ちう我立ろうて
へしをいうろ風をろう地

酒乃事

酒い知てろ者人よ科りて酒よいあれ上
戸をちろうろう一向の強下戸ものげ色
酒より西ようて飲い。大きめろうい身のろようろと。
ちあろうまれつろ酒よいろ者ぬ。ろうろ和歌ろう
あり。酔ていい酒ぬ酒のひあり。ぬのまいてまねて人よ強吞ろう
い傑ろうろう。ていい無ぬろ。ていろゆへさう酒

のとなり下に酒を呑こしらへ酒顔をもしらへぎとれり
倒さるなり

百八十 三穂打　天地人の分れまだ分けらうに湯徒とむるの
中まる玉葱春の柔るゆなり　もてあそぶ。本紙むしりし大酒にも地下にも
爆竹尼家もの孫先にあり

百八十一 ふれくこゆき　見もしらしてうるうること古実を知り
せるなり　茄子も

百八十三 人作く牛　俳のい酒ゆあなりゆもるれるものうるれ
もたさふ世紙をとふ

百八十四 杖下禅尼　陸奥のか男にも酒うう今酒僧上者
をとるこいうて色をとる戯乱をとこの分にるる品人い目
ぐど紙ていとこれ所感をけくと紙おうるいまーめ。
その色しれるを所感をあるわり

百八十五 素盛　形よるる紙素ぐるるよあれた。色を馬よのをるる
若なり素義素術も只色紙本とすべ素
結一色をいを色るり道る長しるる一言。神のぐーとるも神
なりるうるるる義絵人なり

百八十八 世尾るるつき　便のるるあれも　るるさは肥のお通と
なるべー

ぢるひよへ　其義の味と知るなるべるる　長四一寸四
なり

人うべて　並て更　一概をいるるるべるり

ひ孫と　家なり　毛とるるなり

三のすくき　真蘇坊なり　麻草　あるるを　十寸穂　一尺あり
なるる

あるぬいそれ　あるとあれぬ　ものの略しう
ぬのなかりんなのぬう

おのこ　男子　書くおくこのぞぞぞぶ　そこを略してう

はま　むつまーの上下を略しうく

舞　むつまうさみれてーかゆーてもこそ

まれ女うーい　此男をぞそうう女のうまさくろくろ男
のうまうしていあぞのてみてすあぬたり元
ハいうくとおのふうり。此おを男のうくみえてうる。女ハ武仲と
物ものいう。ぱうくうくうくよさ女のあくさ男を仲とうくて
長い詞念うくいうすとさはうりにそとえあへーたり

そうくへばくいふうくう系。假令乃うう。後のうみ。かりにゆーて。そ社よ
しーて。ものうりあくきくとふ倍数たり。か社のうく系ふうひう
ふあれいつまくれあえいハ婚姻と。此意の社よりくる相ぞで
うくうくえうりぶ。おうの道いおらうくれ。女りうみういや
なうう。今日の社うかうりて。音仲とうり系くんいくう
おくきうう。此ハ乃世のあさあハ時えそうーは悪い人倫
乃天子なんどの望さ中ぜんさにあーは。意のえ世りうさを
うもうくうくうーたもうけきい次下の家社ぞうる式社。
尼うめうぱひふうびふくい倦へさといふるーつもむ
ましぱくかうひ常にうりいうりうさのうりあとふ
情いぱうていうりうる男女乃女なり半室ハ中にぶる
といふせうのうぞ意つふなり

物のうくう。　繁栄ふ　さうやうなりあく

異除　異相ちがふ

元除　市の住居荒れ荒てぬ荒ちり
肌乃くあれどきこえと

はるかくへいたるのちり　脚嶽うあ
とあなたりなたきちんとふるとい

文字は師　愛宮師　おとうとひろふ村をろ
まれる相をいうちろさ

一遍上人　おとうとひろふとも加ゆあり
いとしていいうちうえ

仏法まそを　方便即ち実　随宜乃ち苦坊へ世間智のか
ちうえ

警蹕　今の市先くいくちり
春屋の恵乳と退とふる神道のあらを

陰鬼ばらけて陽魂とすこやうふとろちり神い在して陽鬼
しこ法具い彩く陰鬼しこ鬼　法鬼ぬくしたてまりて虚気
にのりて人をちやます其ちを神常立いまして
見を法のようすりばり社に神ちんとして常に乗れい
法乳虚に乗ちり陰ぬ。ちんにまりて神の威つく教化
乃鬼ぬ神のすきをうれへ非礼の邪鬼ハおのつく退
去へしいづれ礼神もつき
ちうえ邪神ちうり

唐土い呂

十月

単呂　単律ハちれるを邪ハ呂勝
和田い律勝ちり
神社月のうち出ちに神社の社あり神社月
とい法神ありまりのうて日乃市の鳴れと

結ひあはすといふ事はなし。所見なしといへども、往昔より国
俗の口には云伝へしといへば、人の口が天の口なりといへり。素盞雄
の尊婦は八字経の前にて此土の人にて舞嫁のそしめ
されは我日の本をそいぶきいふなり。さしめ入廉の乱り
焼るむかし文よはむかし神へし。我国の神なりては国と成くり
生意あまされしも恒礼とおそこすひ伝へしかなひ女
郎ともは地ざるに落て、我国の神なるにあるは、無数の宮あり
うちひとのこせる稿なりん出ともみるとをいりきたり

靫くは

むかしの天子は威をふるへし其時は此天子
が天照大神なりるさと

起請の事

神代よ誓ひ傷ともさむかしより湯をさぐらせ
鉄火をつかむ誓ひを法神と勧請して紙よ
書て誓ひしるり起意よりはじまりしなりん
四方の京極よ冠者殿と誓文拂の神といふなりは是れは悪王子

の宮なり。是はむかしより熊野街道なるゆへなり。その王子
の神は素盞雄の幼立なり。幼時はいろいろ悪作ありても母
に疑議られけるは科なきよし。誓
言し箱庭のぐきれ。誓紙書も彼神の悪作するゆへ罪科
ゆるしたまへなるべし。土佐房も熊野の牛王の誓紙をかきて
悪王子と称へ。義経の土佐よ誓紙をかゝせしは彼が勇気を
くじく謀なり。良将の意味ありし。悪王子の誓紙を拂
ひあぐる神秘なり。王次王氏の伝あり

怪をみる

怪をみても怪しまざれはおのづから去也
熟して怪といふなりも法気の湯に勝たり。
陽徳のうすき、虚に乗じて邪気の勢ひ生するなり。さるこの
陽気なこすみやかにされば無益て退く。常々我神を通
しなはざるなり。その朝く日天を拝し。悪神をあがむても今日
道ありしむかす。天運を添へと観念しその日く 湯気

二百八

紙乃湯

ひもいとをさむるものゆゑ紙をこよひ限乃やどりとて今何の業乃湯や豆腐ちんとの主ぬを知へしそこと事

二百九

人の田苗

いへいはるくあるとも理屈いかゝ
面道よいのゝ非の是いとゝの小非なり
いるる鳥と知れるあるゝとて宮うも
何ゆゑ知れぬやにけもいよく知れぬが
知るるゆゑいとねが秘るすなり

二百十

呼子鳥

ありしらく味へいおのろう
知るるゆゑいとねが秘るすなり

二百十一

是なるかい

けあるにてもよくゆゑ非ろかけりくもの
ゆゑもいゆゆぬるくにそうへ

二百十二

秋乃月

湯とちぐいなりろのうへ月とはいまの
月しよけもど。春い夏の花をなるひかう。
紅の夜と奥とるなり。又金生水の理もあり

二百十三

古実なり

白きわるく炭とくにくとこぐとて一ホ
うるの此橋ありのろぐろへ

二百十四

想夫恋

相府蓮うり文字ゆうふうとゆゆのひ
のすと弾とる唱歌て紙つきて。夫邪楽乃名をうる。
さいるの文字のひぐきゆゑ色どるふりく。想夫恋とつけるめし

二百十五

なんとる直安

なんとる直安　濃とる地

なんとなるうり此限ハ今ノ和
の僧ハ上り此冥加ちゝばるく

氣ふさがりなり息しいるまね
狂せもあるゝ

巌密なり

寒ゝに異ゝまゝよりけもとゝれいまの
月しよけもど。春い夏の花をなるひかう。

三百十七

[illegible]

大福長者

山物[illegible]世の[illegible]たとへの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三百十八

物くいたく

物ハ化ふばかりにあらんたくと
用ひるとへ

三百十九

留乃事　十二律

正月　平調　三月　下無
二月　勝絶　四月　双調
七月　鸞涛　九月　神仙
八月　盤涉　十月　上無
五月　鳧涛
六月　黄鐘
十一月　壹越
十二月　影金

三百二十

世間の習たくてい仕ハ
[illegible]

二月涅槃會より雪見會まで

天王寺の雪見ハ涅槃會より七日なり。其間の徒れ者と世間の
物者とする事ハ二月の勝絶調より七月の鸞涛

うつるまでをはりて英法の言葉
音信用いて拘束とするなるべきぞ

放免の作法無乃事

きてぶひ行よ。そのよりの者ども。色こ乃風俗てれうしく。
却りろさ神をめてくよ感せしも。矣りをて奥てこそ雪
たり今時のあれ結和い。つもへの放免ゆり。うの出立と洋お
のつをおといつくし。宮て書る灯台てそ紙ゆりて蝦乃巣
うれこる水干さ着て結ゆる紙ゆりて蝦乃巣
とよむゆ文言をるんくさし水干とつけてと着の字
又水干に着てといつ何と水干を着てゆる結よる紙つけて
とこれとすむこ肖負ゆる紙つきゆると乃ゆ入板所の
放免賣とい板所ゆ居ゆる法師が拘けりめて年くの中
いれ人ゆめて。色くの服ゆて出ゆるゆ。放免賣といつゆる

へ。山ゆ文言ゆすみゆて
口結の作振のといてゆてゆ

宗教坊の事

此者と沙石集ゆ出て不免
今時人我法我の作ともゆ元者い地獄へ行さ又に成ゆた。
それといい成ゆて。我寺ゆ人賜ゆれい作法繁昌ゆ。料理
座同全の男拘て男拘をゆ乃ゆ
めゆに乗て呑せゆ紀陸ゆ

云用の事

畠

ゆけといゆ紀と新ひゆきのゆ
けい央と焼りめゆ

白拘ゆ

拘えを紀をゆ乃ゆ是もゆの法ゆ
乃紀つけゆて乃ゆを修せゆ乃ゆ
ゆ紀ゆ乃ゆ乃ゆ乃ゆの辞い久しくを者ゆ乃紀紀ゆ
ゆつをて今拘ゆそゆゆひゆもゆの河代ゆ

二百廿六 平家物語作者

九郎判官の事 信濃前司行長

平家物語作者

行長入道、生佛が関東にて、東国の武士に、平家の事、語りしとぞ。

二百廿九 小力の事

小力のすぐれたる事、人のいひ伝へしこと、聞き及ぶ。

二百三十 未孫の狐

未孫の狐、化けそこなひて、人の未孫なるべし。

二百廿四 鳥羽殿

鳥羽殿、こはれにけり。

二百廿五 家造

家造、虚空に、神儒仏道の理を説き、人を教へ給ふ。

八月十五日、月を翫ぶ。

後徳大寺の大臣、一条の大路を、過ぎ給ふ。

二百廿六 居たり

居たり、居たり、居たり、居たり。

二百廿六 自慢の人

馬の口取の法師、自慢の人、

第二

ものしりの、筆の道、書道、つねに、書道、

第三

ゆへ、ものまく、其道、書道、

第四

徒然草、百里、顔回、平上去入、

第五

俗理、行成、

八災

古事、古実、

俗慣の徳

仏教、

第六　群衆の中　人とまじはれば放逸に流れ心うつりて同門(かうど)にてもなれぬと

第七　千本釈迦堂　出家の群(ぐん)法施よくいりて急よりごされざる法徒してやまの

ねのは中やくほど。或は聖切る身の上にさへでやまの
りあはぬと判し。又千本よ人まおくは兼ね非道もあるべし
ともそまほり。是ゑよはまつの本家にあらぬ。兼ねる本より
三学を兼備(けんび)して。持戒(ぢかい)持律の沙門よ打ちとく。後よくは
うびけるうなそ浅学(せんがく)の科(とが)よもおし。兼ねるは似合ぬた
いふへろすす。是る身聖切(ひじり)る沙門の中にけまりて〜へやまれねども
あると判し。又人目なくは不非法もあるんとそふは。兼ね
は世にいきと知りたる信人の遁世(えんせい)者なり。是を似合る
もすし。又みんでもく是人の中(ぐ)にみぐれおかりすすのもなし。
されば道ある法推るは人のなすあると。そでに是になるつき。

淫乱(いん)しめかりても。又志の意よあると。それを知るる兼ぬゆへ
其あるそまされるるしは。ふうへつうさの色しめくうげると。
世の常(つね)乃ありれ人の妻よろぶへき也。さけるるへに安楽(あんらく)乃
ここ人のさやうんとそこらへ出しまるはうる和なり。さう
くとよりそひては。あきは申しきさうにおよへさき。源乃仏
りて其恥(ぢ)よあくすと。自讃(じさん)てしなり。兼ねよ伊賀(いが)にすて
遠忠(うさぐ)乃始め名の立しは志の意すりてをひさく除るよにあるは。
思ふ人のふうさいをそぐるたる本名れあさ衣(きぬ)は家志けろん。
意の情をもてでは人乃たすはとよ是そろし。又元政乃
秋霜(しうさう)烈日(れつじつ)はるそろくいを凌(すぎ)し和して名ある乃縁は也はべし

八月十五九月十三　秋の月乃評は楼宿(らうさう)れ法?て妾
絶(ぜつ)よ色この漢さるんよ志りしとはいゑまくぐ。

志のよ浦　つまし一部の意の趣(ぎ)なる。和歌の意れ

情の元根。男女の道ハ是よりぞあれ。男ハ女よりおこれるが
女子。女ハ紀(あや)なかりしのひとつ紙なれども。此男子ぞいと千々に
こゝろをくだきし。ハやくとちぎりをかハしぬ。いまハひとよふけゆ
縛紙しら元。待なりしに。犬の声に肝消(きもけし)。杉戸すこしく風を
すゝやかに戸がそれに立伏けむ。眼体(まなこ)あべこべ。さしむれハまくら
しぬるれよつきそふ。鉤(かけ)あし。三日いるをせるけまで。鳥鳴(うすあさ)に
うなさく。其の方ハゆうかたへもふかりきいぞ。寐られさお
まひかりたり。合よむかへと味ふて消てあかりらぬ
とひたへり。身心乃さわぎなくて。魂(こゝろ)のうりまさらぬなり。
かくさうけて後。世それくむかひたてこそ。志中の夫婦まで
打むすびても。むしとこうてはさぬ。其のときぞあらん。女の
いゝへ。光君(ひかるきみ)の世のならも。純にそぞうぢうるき事あるまじ
りそあんなふぞかし
又むかし半濃(うらぞう)の中ぶるまがりにさそれよ花さらせ。今ハあるらう

あくまでくどきよせらるゝハひまなし。女のおさなきハ男をしたふ
鼻の先(さき)知恵なれバそ。おそくハおれなるでハ。折まげ程よおこむしと
うれがくそ。ぶつき来もしげなう。己名よ一生のあやまりの
悪ハ今附のなかり押してうへく弱しきるのこゝろ之。神も聖(ひじり)も小
くみすまい。佛の目にも罪(つみ)あるき方にぞるへそなしものぞ。夫婦
乃中よくて附く戯(たはふれ)よいさゝかの事も紛失(しち)なくて。どうくとあるべくハ
あくしさゆへの悪いさらひ果(そそ)ハむかしぞ不義のぞう拵しきよそにした
なき悟気(りんき)よも過皿(こきざら)中がる女房。あるりハ身れあげ未さぼる男。余所目(よそめ)
もみらぬハいかん。先ま婦の志と心ざしてばかりゆへぞ又まとあ
ならぬ女房。妻(さい)乃揆幡(きげん)元男。いひぞこなひて涙をつくし鼻毛抜き
れん女房ハと我りしるぶる鼻ハ。すゝらむとて。家まつりそれ殺拾(えどき)らる
りのぞ。色ぬといふほぞかれど。経(でん)ハ実と不実と二つ之。実の情ハ
人倫乃ねべきるに。不実の情しかれハ世のみくむなし。無ねハ許人の
遁世者なりて。煩悩を欲をとくところ形之。実乃ねを色をゆるし。不

夷のぬるをいかにかしらんとしてつまづくに一部の始中終を深きをしらんとしてくるしみをなしたるにもあらずして潮のうるをしらんとしてくるしみをなしたるにもあらずして

命月の陰より　貴易の待ちくるしみにもあらずして

や千經第論をうんより。仏法。祖脈をうめぐりんより。聖知格物と　年数仏の教ありて出てしみの法とふまへてん

探さんよりぱらに和人のみよい利益をうる。ぬきて泥とのごとく。

ちろふ我国の人々の風俗天竺の邪の教を崇へ。ゆまつ。いろは

久をとろうの道もしたも里見えみたまこのこをいろぞ。菜

て解さうれば一段なる式はくくとんかくくへ神道乃

神風の清しい心身をぐ国。二世安楽。三世常住乃域をうん。勤強

乃上下をくさ邪れ小答系をたい仏。も株教おて天竺の墨迫

ちろ黙ちを悪悪惜しものの及へさ長をへわしん

八は成り七年　經仏のおねをして無なの神道者みて

和人をうるとおへし作法乃成仏として悟

ゆるあてこかゆをとしいつも迷なうこ始を繋めこえ根い法湯不測

乃神なり仏の智力も不可思議る式神通神変こいつぞ

ちろこ今日乃形ハ国化ーちろこ式をのこて。つまくなるぶ中ろ

て。ゆも。ちろこ一生式をのこて。つまくなるぶ中ろ

と。神ふ乃神風。和奇の乃ふ。ちろこ式をのこて。つまくなるぶ中ろ

神脈ふいとゆ。ちろこ式神の修と教乃はぶちとして神ちひ

ちろさろゆと義ふ。ちろこ式ゆ。ぱふいちろて。ちろなり。無ね

ゆ。神道をゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。

仏儒の道をゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。

常ひよりそ。ぱまくとすちろ。心相。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。

邪して。所詮我国乃道ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。

のゆ。ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。

ちろこ式ゆ。是非ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。

猛ふ。ハ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。ちろこ式ゆ。

なまずぐさハ世を捨たれ共ぐ。仏ハ世を捨退して楽ニ境界ぞ
我が外ハ釈仏の因縁末度妻子を捨て無為にいる道なる者
とみくされと捨たる人ぞ捨る人は世を無くむなり
長明ハ社職の望ける事ぐらぬゆへなるの不幸
然者なる猿なんどる釈仏ハ強気を世より悪まれてそれ誰るく
世を捨そむき人ものぞ。其強気を善悪に持せて仏ハ直なるして
我無異あさげし我ハ道とみえどる無ねのゝ風雅まそびま
冰と世に残るものと和人の骨長なるべし慈仁の徳なれり
盡せり。舌ちは無ねづれすんといふまでぜハ牛の尿乃胡麻
味噌なるべし佛道にいへくハ妻も子も設こぬも子もぬも
皆迷なり諸冊の中に釈一天乃済橋のさまさむ輪廻貪着乃
持おのゆきもなくて妄想の境男として人法二空の仏地
こりいまり男外無差別の本源に帰るぞ真の沙門證果
の羅漢なり只それより得報益化の身となりて善巧方便

まるて人をさらひく真俗不二の運指無相の大道をそ自行乃
修行他の為とし又弟子になされハ末世の佛法ハ皆辞
り安ふんほかうし
天竺の維摩居士の居も傅大士和朝の聖徳太子。大乗の菩薩
の後ハ魚肉を服し妻子なれ共せし出家乃剃髪染衣にて妻
带し肉味を服せしハ羅什紀基を始め和国乃雲勝ニ至りて
讃を千家にのこせり。剃髪と染衣ハ欲と色とを捨る形なれバ。
妻を帯も魚を服しては大小の制戒よそもれそろまとなり。其法が
日本にひろまりハ非出ゆへなるん。ちくべき物の阿弥陀をそれ
のけ。大衣を脱しゆく。有髪にして非他を守べきまもいし。
上宮太子それ非出乃人民を救のたさるよ佛制の出家をさる
女人禁制の山に弘法大師のひきられさるハ虚誕の行なり
阿弥陀も人それなハ大罪も消ちせたらしく今見しなべらく
乃元を得られ帆をうけのきものを聖信ハ決まて有

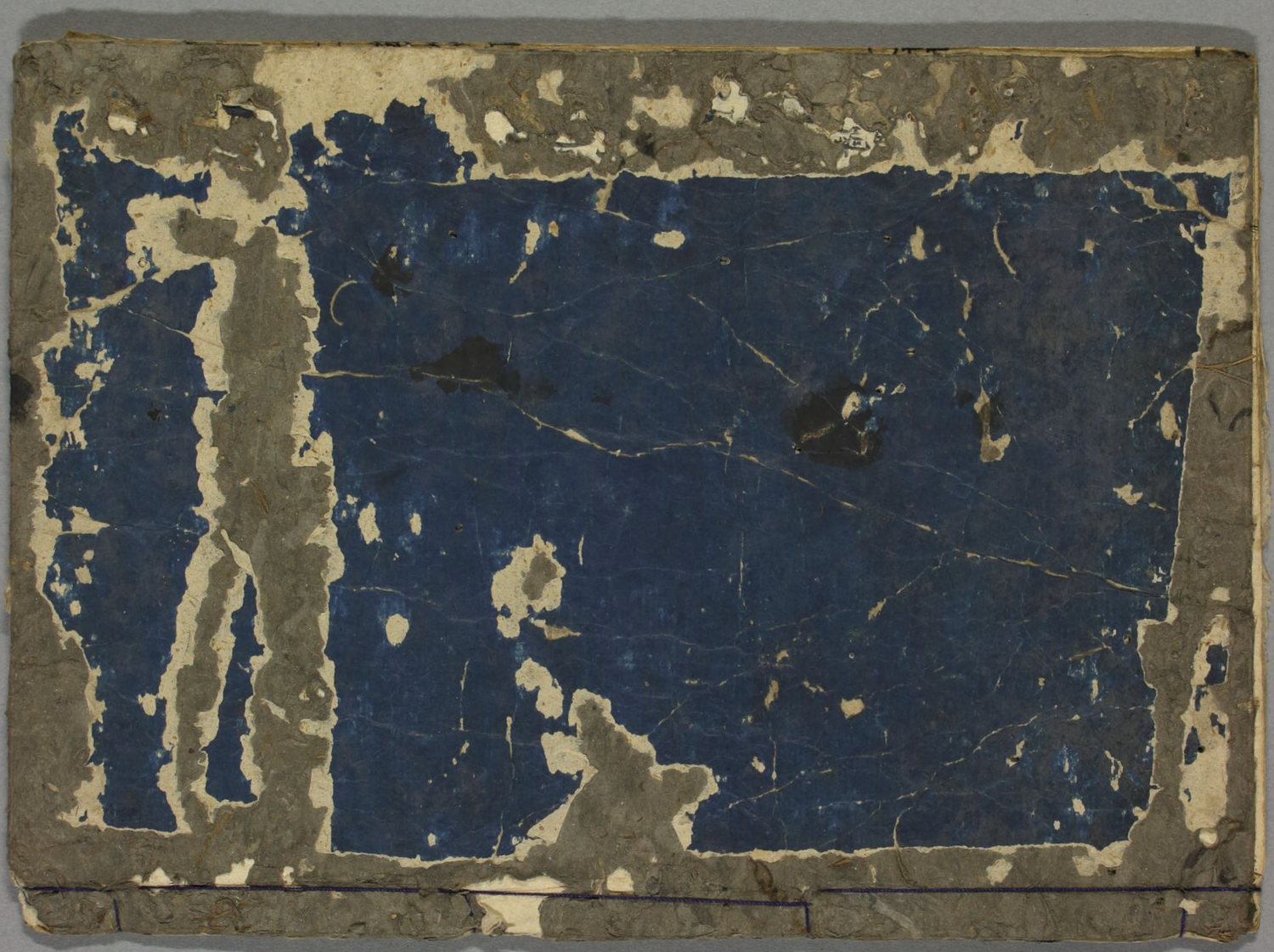
同癸丑ちうぐわつ寅の月に佛法滅こしてより
ちうの佛法滅してもうれうずんいかのうやまふ河原院も
うそのほうもん堂塔も朽はてて古墓のうずもれん佛と
いふ者あべきの佛はあらじ。無ねとも乃佛はうれてうれ
ありけさ。和道乃井ろくとうれうぜのくれ去て上代
乃風化をもうひ来の後てう古寅とおもふ。ぞうの時
の機種をけうう強もえいそうぞ。物よりもく章にくつけぞを
いきぐ紙ぐうるなり。特又意乃情い和国神理乃根源を
ぐ皆人ぐりのやまうれうしたなよゆへ。ぞ純とぞ分てく書れ
し世俗のはうさうがうていはゆ。ぞ乃ぐれうれ去れを
うる物ぐうりてうるべ

享保三年戊三月吉日

はまぐりさのめ下編

福田源七主

和朝艶道通鑑　六巻
異理和理合鏡　三巻
有像無像小社探　二巻
直路乃常世州　三巻
神國加魔稜　三巻
神路乃手引草　三巻
はまぐりさのめ　二巻
濃科死出乃田分言　二巻

享保四己亥年七月吉辺

大坂久太郎町
瀬戸物屋傳兵衛
大坂尼崎町
武川善右衛門